

Ⅲ 未然防止

1 不登校を生じさせない学校・学級づくり

新たな不登校を生まないためには、どのような取組を進めるとよいですか？



- ✓ 全ての児童生徒が、「学校は楽しい」と感じられるような魅力ある学校・学級づくりを進めましょう。
- ✓ 大切なことは、児童生徒が「自分という存在が大事にされている」「学校が心の居場所になっている」「学校が自分にとって意味のある大切な場所になっている」と実感できる学校・学級づくりをすることです。



魅力ある学校・学級づくり

全ての児童生徒にとって、学校・学級が安全・安心な居場所にするためには、教職員が、児童生徒の個性の発見、よさや可能性の伸長、社会的資質・能力の発達を支えるよう、教育活動全体を通じて、声かけ、励まし、賞賛などの**自己存在感**や**自己肯定感**、**充実感**を高める働きかけを行います。

また、全ての児童生徒が自分のよさを発揮しながら活躍することにより、互いのよさを認め合ったり、**自己有用感**を感じたりすることができる場や機会を意図的・計画的に提供するためには、「魅力ある学校・学級づくり」に係る取組を教科等横断的な視点で教育課程に位置付けるなどして、組織的に取組を推進します。

さらに、「こども理解支援ツール『ほっと』」を活用し把握した児童生徒のコミュニケーションスキルを踏まえて、児童生徒が**よりよい人間関係を築く力**の向上に向けた効果的な取組を推進することも考えられます。

いじめ等の問題行動を許さない学校づくり

学校が児童生徒にとって楽しく、安心して通うことができる居場所であるためには、いじめや暴力行為、教職員による体罰や暴言等、不適切な言動や指導などを許さない毅然とした態度で適切な対応が行えるよう、校長のリーダーシップのもと、学校全体で組織的に取組を推進します。

また、教育機会確保法の基本方針では、「教職員による体罰や暴言等、不適切な言動や指導は許されず、こうしたことが不登校の原因となっている場合は、懲戒処分を含めた厳正な対応が必要である。」とされており、決して許される行為ではありません。

※国立教育政策研究所「生徒指導リーフ leaf.18」(平成27年3月)

※「子ども理解支援ツール『ほっと』」(道教委Webページ)

※不登校に関する調査研究協力者会議報告書～今後の不登校児童生徒への学習機会と支援の在り方について(令和4年6月)

2 誰にとっても分かりやすい授業づくり

「個別最適な学びと協働的な学び」、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に加えて、さらに新しいことをする必要はあるのですか？



- ✓新しいことをするわけではありません。
- ✓大切なことは、生徒指導の実践上の視点を生かしながら、学習指導要領の趣旨の実現に向け、全ての児童生徒にとって分かりやすく、児童生徒が自らの可能性を発揮したり、互いのよさを認め合ったりしながら、資質・能力を確実に身に付けることができる授業づくりを進めることです。



生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくり

(1) 自己存在感の感受を促進する授業づくり

授業において、児童生徒が「自分も一人の人間として大切にされている」と感じ、自己肯定感や自己有用感を育む工夫が求められます。

(2) 共感的な人間関係を育成する授業

授業において、互いに認め合い・励まし合い・支え合える学習集団づくりを促進していくことが大切です。例えば、発表などにおいて、失敗を恐れない、間違いやできないことが笑われない、むしろ、なぜそう思ったのかという児童生徒の考えについて児童生徒同士がお互いに関心を抱き合う授業づくりが求められます。

(3) 自己決定の場を提供する授業づくり

教員は、児童生徒間の対話や議論の機会を設ける、児童生徒が協力して調べ学習をするなどの取組を積極的に進めるとともに、児童生徒の学びを促進するファシリテーターとしての役割を果たすことも重要です。

(4) 安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業

授業において、児童生徒の個性が尊重され、安全かつ安心して学習できるように配慮することも不可欠です。

- ✓学習指導及び生徒指導の目的を達成し、生徒指導上の諸課題を生まないためにも、教育課程における生徒指導の働きかけは欠かせません。
- ✓大切なことは、教育課程の編成、実施において、学習指導と生徒指導を相互に関連付けながら一体的に充実を図り、学校の教育目標を実現させることです。



3 SOSの出し方に関する教育の充実

児童生徒が不安や悩みを一人で抱え込まないようにするには、どのような教育活動が有効なのですか？



- ✓「SOSの出し方に関する教育(援助希求的態度の育成)」を実施しましょう。
- ✓大切なことは、「SOSの出し方に関する教育」を**教育課程に位置付ける**とともに、**カリキュラム・マネジメントを充実させ、各教科等や学校行事等と関連付ける**ことにより、**教育活動全体を通して、組織的・計画的に取組を進める**ことです。



4 本時の学習…「友達が相談しやすい会話の仕方」

- (1) 本時の目標
困っている友人の相談の抵抗感を理解し、相談しやすい会話の仕方を身に付ける。
- (2) 本時の評価
友人から悩みを相談された時の対処方法について書き出して交流するとともに、学習したことを基に、課題解決の方法を見付けたり選んだりするなどして、相談された時の対処方法について実践している。
(知・理) ②、(思・判・実) ②
- (3) 展開

過程	主な学習活動 ・予想される生徒の発言等	○教師の主な働きかけ	■評価規準 □評価方法 ▲留意事項
導入	1. 悩んでいる時に周囲の人から声をかけてもらった経験について、ペアやグループで出し合いワークシートに記入する。 2. 教師の説明により、本時の学習内容について確認する。	○ 生徒それぞれが経験した内容などを自由に発言し、ワークシートに記入するよう促す。 ○ 本時の課題を提示し、学習の見通しをもたせる。	
	【課題】困っている友人の相談の抵抗感を理解し、相談しやすい会話の仕方を身に付けよう。		
展開	3. 悩んでいる友達への対応の重要性を理解する。 ・声をかけた方がよいのではない。 ・悩みを聞いた上で、先生や親に相談するよう勧めるとよいのではない。	○ 「気付く、関わる、つなぐ」という3つの用語を伝え、これら3点を詳しく学ぶことを伝える。 【発問】友達が困ったり悩んだりしている様子の時、どのように対応すればよいか考えてみよう。	
	4. 活動の説明を開き、体験する。		

※自殺予防教育プログラム(道教委 Web ページ)

Q. 「SOSの出し方に関する教育」が、なぜ、必要なのですか？

A. 子どもは、ストレスを感じる困難な場面に直面しても、自ら助けを求めることができず、命を絶つことで解決しようとする場合があります。子どもには、助けを求める具体的な方法を教えることが大切です。



※SOSの出し方に関する教育を始めましょう!(令和2年10月)

○ 本プログラムは、児童生徒が、つらいときや苦しいときに、「誰にどのように助けを求めるとよいか」について、具体的かつ実践的な方法をロールプレイなどの体験的な活動を通して学ぶことができます。

○ また、本プログラムには、指導案やワークシートのほか、実践事例等を掲載しておりますので、各学校の実態に合わせて御活用ください。

○ さらに、「SOSの出し方に関する教育」等を実施するに当たっては、教職員が、本教育活動の意義や効果、他教科等との関連等について理解を深めるため、左記の資料等を活用するなどして教職員研修等を充実させてください。

- ✓本プログラムを実施する際には、「価値の押し付けを避ける」、「協働的な学びを重視する」ことに留意してください。
- ✓大切なことは、教職員と児童生徒、児童生徒同士が学び合うことにより、自分とは異なる思いや考え方に触れ、多様性を認め合い、仲間との絆を深めるとともに、児童生徒のコミュニケーション能力や望ましい人間関係を構築する能力を高めることです。



- ✓教職員が、児童生徒が発するSOSを受け止め、適切な指導・援助ができるよう、児童生徒の状況を多面的に把握するための研修の実施や、児童生徒の心と身体の変化等を可視化するツールを有効に活用しましょう。
- ✓大切なことは、これらの取組を通して、教職員の教育相談に携わるための力量の向上を図ることです。



校内の教育相談体制のチェックリスト

①	問題に気付いた人が、問題を全体に投げかけられる雰囲気がありますか。 子どもの変化に気付いた人が、職員室で話し合ったり、学年会で話題として取り上げたりするような雰囲気づくりが大切です。	<input type="checkbox"/>
②	話し合いが継続的に行われるようなシステムができていますか。 管理職を含め、教職員がチームとなって情報交換を定期的に行い、情報の共有化を図ることが大切です。	<input type="checkbox"/>
③	事例検討会を実施していますか。 定期的に事例検討会を実施し、子どもの心理についての理解や自殺予防の対応についての検討を重ね、自殺に関する問題意識を高めることが大切です。	<input type="checkbox"/>
④	スクールカウンセラーや学校医との連携はとれていますか。 教員とは異なる関わりができ、子どもが心を許して相談できる存在として校内体制に位置付け、十分な連携を図ることが大切です。	<input type="checkbox"/>
⑤	学校だけで対応するのではなく、専門機関を積極的に活用していますか。 警察や保健センターなど地域の専門機関と日常的に連携し、顔見知りの関係になることで、自殺の危機が高まった際などいざという時の迅速な対応につながります。	<input type="checkbox"/>

※子どものSOSに気付くために(令和2年9月)

場面別の観察チェックリスト

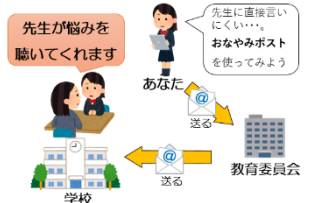
場面1 登校時、下校時 <input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・登下校を渋る ・遅刻や早退が増加する ・挨拶に元気がない ・友達と一緒に登下校したくない 	場面2 朝や帰りの会 <input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・体調不良をよく訴える ・朝夕の健康観察に変化がある ・朝から眠いと訴える ・表情や目つきがいつもと違う
場面3 授業場面 <input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・学習に取り組む意欲がない ・学習用具の忘れ物が多い ・教師の話が聞けない ・ぼんやりしている ・友達と関わる場面でも参加しない 	場面4 休み時間 <input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と遊びたがらない ・一人で過ごすことを好む ・外で遊ぶことを嫌がるようになる ・保健室に行きたがる ・他学年の子どもとばかり遊ぶ
場面5 給食(昼食)時 <input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・食べる量が極端に減る ・食べる量が極端に増える ・食欲がないと訴える ・友達との会話が減る 	場面6 学校行事 <input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・参加を拒む ・参加への不安を訴える ・行事が近づくと体調不良になる ・行事への欠席が多い

※子どもたちのSOSを受け止めるために(令和4年5月)

- 教職員研修などの機会に、上記の資料を活用し、複数の教職員がチェックしなかった項目について協議するなど、全教職員の共通理解のもと、児童生徒のSOSを受け止められる力の向上を図りましょう。
- 児童生徒が学校や先生に直接伝えにくいことを伝える手段として、「おなやみポスト」がありますので、児童生徒がいつでも相談できるよう周知しましょう。

おなやみポスト

あなたの悩み、学校までとどけませんか？



令和4年度の相談件数は、550件を超えました。すべての相談に対応しました。

おなやみポストはこちから
・小中学校、高校・特別支援学校
・学校のある市町村(※)の教育委員会
・市町村名
・学校に届きたいこと
・学校にほしくないことを入力すると、学校のきょういっくいに届きます



<https://www2.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/hoodmer/ss/>

北海道教育庁生徒指導・学校安全課

※おなやみポスト

- ✓児童生徒の実態に合わせて、上記の資料等の要素を取り入れた授業を行ったり、教職員研修を行ったりするなどして、「SOS の出し方に関する教育」の充実を図りましょう。
- ✓大切なことは、「SOS の出し方に関する教育」を通して、どんな子どもを育てたいのかという目標を学校全体で共有し、評価・改善しながら、質の向上を図ることです。



4 学校の風土の「見える化」

児童生徒一人一人にとって、学校が安心して学べる環境であることを確かめるには、どんな方法があるのですか？



- ✓ 学校評価の仕組みを活用したり、学校の風土等を把握するためのツール等を活用したりすることが考えられます。
- ✓ 大切なことは、安心して学べる学校づくりに向け、児童生徒の授業への満足度や教職員への信頼感、学校生活への安心感等の学校の風土や雰囲気客観的に把握し、関係者が共通認識をもって学校運営を改善することです。



○ 文部科学省が取りまとめた学校の風土等を把握するためのツールや導入に当たっての効果、実践事例等を参考にしながら、各学校の実態に応じて活用してください。

03.学校風土の把握とは

3 学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする。

児童生徒がアンケート調査等に回答する。

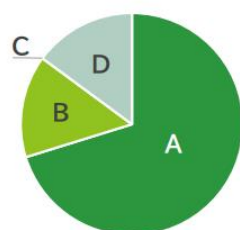
(質問例)

- ・自分にはいいところがあると思いますか。
- ・不安や悩みを相談できる先生はいますか。
- ・スマートフォン等で友達とメールやSNS(LINEなど)でのやり取りをすることがありますか。
- ・睡眠時間は平均してどのくらいですか。
- ・あなたのクラスではみんなが掃除当番や係の仕事を責任をもってしていますか。
- ・SNS上で仲間外れにされたり、ひどいことを書かれたことがありますか。
- ・将来の夢や目標はありますか。
- ・授業中、難しい、ついていけないと不安になることはありますか。

- ・教職員の経験年等や考え方等に左右されず、エビデンスのある分析に基づいた対応方針を立てることができる。
- ・教育実践を振り返り、修正する手立てとなる。
- ・いじめ等の諸課題を早期に発見し、不登校を予兆する等、困難を抱える児童生徒を早期に支援することにつながる。
- ・児童生徒一人ひとりの心身の状況、学校生活への安心感、喫緊の課題やSOS、学級や学年の雰囲気や傾向が分かる。
- ・児童生徒の見ていなかった長所や得意を発見できる。
- ・児童生徒が抱える課題の詳細が分かり、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家等との連携につながる。

実施状況(令和5年2月時点 児童生徒課調べ)

学校では、学校が生徒にとって生活しやすい風土雰囲気であるかを把握するための生徒に対するアンケート等を実施していますか。



- A : 全ての学校でアンケート等を実施している(学校や教育委員会独自作成のものも含む)
- B : アンケート等を実施している学校がある
- C : アンケート等を実施している学校はない
- D : 教育委員会では把握していない

アンケートツール例

Q-U/hyper-QU

子どもの満足感や意欲、集団の雰囲気などを把握し、いじめ・不登校対策や学力向上等に活用できる。

i-check

「レーダーチャート」「散布図」等で、学年やクラスの状況を視覚的に把握。教科学力とのクロス集計も可能。

ASSESS

学習状況や友人関係、本人のソーシャルスキルなど、6領域学校環境適応感尺度で構成されたシートを活用できる。

シグマ検査

学校生活だけではなく、学習・家庭・心身の状態を多面的に調査し、生徒の実態を詳細かつ的確に分析する。

学校風土調査

エビデンスに基づき学校風土を4側面で評価する。課題と強みを明らかにできるWeb調査ツール。

クラスの概要

出典:i-check(東京書籍株式会社)



【利用者の声】

- ・これまで抽象的な表現をするしかなかった取組を数値化でき、具体的な目標として提示することができるようになった。
- ・学校生活以外の悩みが分かり、早期対応につながった。

※学校風土の把握ツール(文部科学省)